

船井情報科学振興財団 留学生レポート

2012 年 10 月

荒木 淳

1. はじめに

私は、2012 年 8 月よりカーネギーメロン大学コンピュータサイエンス学部言語技術研究所 (The Language Technologies Institute of the School of Computer Science at Carnegie Mellon University) の博士課程に在籍しています。私はこの博士課程の入学に至るまでに遠回りをしていて、日本の大学の学部 (4 年) と修士課程 (2 年) を卒業した後、日本企業二社におけるソフトウェアのエンジニア職 (6 年 3 ヶ月) に就き、さらに米国の大学の修士課程 (1 年 9 ヶ月)、そして米国の大学における技術スタッフ職 (1 年) を経ました。本レポートでは、留学決意、出願、そして留学先の決定について簡潔に記述します。

2. 留学決意

私が留学を決意したのは 2007 年 11 月で、日本で二社目の会社で仕事を始めて約一年半ほど経った時でした。留学の決意には様々な理由が組み合わさっていますが、大きいところでは三つに分けることができます。最大の理由はもともと人工知能に興味があり、日本の大学時代にしていた自然言語処理の研究をより深めていきたい、という意欲でした。人工知能と一言と言っても幅広い分野ですが、その中でも、人間の高度な知識処理を支える自然言語に関わる問題が最大級に難しい問題であって、その中でも特に高度な意味処理をコンピュータに (半) 自動的にさせることや支援させることに、科学的な面白さと実社会への有用性の両方があると考えました。

二番目の理由は、日本で企業に勤めていた頃から、いずれは海外 (アメリカ) に出て国際性を磨きたいと考えていた、という点です。日本での就職時 (2003 年) に「グローバル化する社会の中で、これからの企業活動が日本国内で閉じることは少ない」と企業人であった父から聞いていたのですが、実際にエンジニアとして様々な技術や外国人と関わる中で、そのことを肌で感じていました。

三番目の理由は、私が日本でキャリアを積んでいたソフトウェアの分野では、どうしても米国で生まれたものを日本に適用するというパターンに陥りがちで、そのまま日本でエンジニアとして成長するには限界を感じていた、という点です。エンジニアにしても研究者にしても、所属や肩書きはどうあれ英語は今後ますます必須になり、日本国内で得られる成長よりは海外 (アメリカ) に出ることで得られる成長の方が大きいであろう、と判断しました。

3. 出願

留学を決意した後は、会社勤めを継続しながら、冷静に少しずつ留学準備を進めていきました。会社勤めと留学準備を両立することは簡単ではありませんでしたが、平日の早朝と夜、週末を活用して、留学準備のための時間を捻出しました。留学予備校に通い、時間を節約するようにもしました。もともと帰国子女でもなければ短期留学の経験も無かったので、英語力の向上には最後まで苦労しました。

最初の出願 (2008 年 12 月) で、結果的にはスタンフォード大学工学部コンピュータサイエンス学科の修士課程のみ合格しました。その時点で日本の修士号を持っていたので、本当は博士課程に直接行きたいと思っていましたし、またそうでなければならぬとも思っていたのですが、現実にはそのように事は運びませんでした。今振り返ってみると、私の場合は日本でエンジニアとしてのキャリアを積んでい

たものの、約 6 年ほど研究の第一線から離れてしまっていたことが大きなマイナスであった、と考えています。しかしながら、そのエンジニア経験は無駄であったとは思っていません。その経験の中で培ったコミュニケーション(情報共有)、タイムマネジメントやプレゼンテーションなどの技術は、扱う言語は違っても米国の研究の現場でも応用可能なものが多いと感じます。

スタンフォード大学の合格決定後、留学のため退職しましたが、その時点では奨学金を持っていませんでした。つまり、スタンフォード大学への入学の時点(2009年9月)で財政援助の保証がない完全なる私費留学であったわけですが、Research Assistantship(RA)やTeaching Assistantship(TA)などのチャンスが比較的多いということは事前に分かっていたので、努力を続けていくことで何とかするのはないかと考えていました。そして幸運にも面接の末、最初の学期からスタンフォード大学言語情報研究センター(Center for the Study of Language and Information)の計算機意味論研究室(Computational Semantics Laboratory)にてRAをさせていただくことになりました。このRAは卒業時(2011年6月)までずっと続けさせていただきました。

スタンフォード大学での修士課程では授業とRAの両立が非常に大変でした。RAはこれまで携わったことのない音声処理の研究であったこともあり、成果を出すのに苦労しました。修士課程の卒業後は博士課程に進学したいと思い、2010年12月に再出願しましたが、結果は芳しくありませんでした。しかしそれでも諦めず、Optional Practical Training(OPT)制度を利用して、同修士課程の卒業後に現在在籍しているカーネギーメロン大学の言語術研究所(LTI)での技術スタッフ職に就きました(2011年8月)。その職務をこなしながら、三度目の出願(2011年12月)までにTOEFLとGREのスコアをさらに向上させ、Statement of Purpose(エッセイ)を更新し、奨学金に応募しました。

4. 留学先の決定

上記の三度目の出願の結果、LTIの博士課程に合格しました。日本での留学準備をしていた頃から、私の中ではカーネギーメロン大学の同課程が第一志望で、スタンフォード大学のコンピュータサイエンス学科の博士課程が第二志望でした。スタンフォード大学での修士課程でも勉強になることが多く、充実した学生生活を送れていましたが、その課程に在籍していた間も考えていたのは、やはりカーネギーメロン大学(LTI)の方が自分の目指す研究の方向性により合っているのではないかと、ということでした。そして、上述の技術スタッフ職に就いてから、その判断は正しかったと思っています。そのような経緯もあって、LTIの博士課程には迷わず入学しました。

私は留学決意から留学先の決定、そして現在に至るまでやや長い道のりを経てきたこともあって、船井情報科学振興財団はもとより、国内外の様々な方々にお世話になってきました。その期待に応えられるよう、努力を続けていく所存です。